令和４年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立栗原北小学校
校長　　石川　雅章

１　学校教育目標

かんがえる子　　がんばる子　　やさしい子　　げんきな子

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○「通いたい学校」「通わせたい学校」「勤めたい学校」 ・児童が安心・安全に過ごすことができ、「できた・分かった」を体感できる学校 ・開かれた学校を推進し、保護者・地域が児童の健やかなる成長を実感できる学校 ・教職員が協働し支え合い、児童の笑顔から活力をもらえる学校
○児童・生徒像	・かんがえる子：学び方を身に付け、自分の考えを表現できる子 ・がんばる子：自分に自信をもち、より高い目標に向かって努力を続ける子 ・やさしい子：自分のよさと友達のよさに気付き、互いを認め合う子 ・げんきな子：心身の健康に気を付け、進んで運動に取り組み、安全に心がけて生活できる子
○教師像	○常に向上心をもち、児童と一緒に伸びようと努力する教師 ・教材研究と授業改善に努め、児童に成就感と達成感を与えられる教師 ・優しさ、温かさ、厳しさをもって指導し、児童が「愛されている」と実感させられる教師

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

【学校の現状】

○児童について

明るく素直な子供たちが育っており、本校をよりよい学校にしようと、高学年を中心として頑張っている。目標を提示すると、それに向かって努力する児童である。長なわや短なわ、マラソンなど、季節に合わせた運動を行い、体力づくりにも積極的に取り組んでいる。挨拶では、立ち止まり挨拶や語先後礼、靴箱の靴揃えが定着しており、礼儀正しさも感じられる。

○教職員について

まとまりのある教職員集団であり、「チーム栗北」として機能している。特に学年内の連携がよく、教材研究や教材作成を協力して行ったり、掲示物を同一にしたりして、同調した指導を行っている。他校の経験があり長く本校に在籍している教員はいなくなり、若手教員が多くなった。経験は浅いが、大変よく教材研究を重ねている。タブレット端末が導入されてからは、若手教員が ICT 教育を支えている。

○保護者・地域について

両者とも、学校教育に対し非常に協力的である。様々な場面でボランティアとして学校を支援してくれている。コミュニティ・スクールとして学校運営にも参画してもらっており、地域の熱い思いが伝わってくる。学校・保護者・地域が「チーム栗北」として、同じベクトルで子供の健全育成に取り組むことができる。

【前年度の成果と課題】

○学力の向上　区学力調査の目標通過率は、２教科平均 81.4％で達成基準を上回ったが、まだ十分とは言えない。新型コロナウイルス感染症予防のため計画通りに進めることができず、補充等の基礎学力習得の取り組みができなかった。授業力向上に向けた取り組みは十分に行うことができた。

○豊かな心の育成
令和３年度より始めた読書マラソンを今年度も継続して行う。自己肯定感や思いやりの育成は目標を達成することができた。４年度はウイズコロナで体験的な学習を多く取り入れ、情操教育に努めていく。
○健康・体力の保持増進
運動発表会やペース走の公開、なわとび月間は実施できたが、水泳指導、運動会、マラソン記録会、学校での歯磨きなど計画していた多くのことが実践できなかった。その結果、体力の低下が顕著になっている。年間を通して体力向上を図れるよう体育授業の改善、休み時間の活用を工夫していく。

４　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプランによる学習内容の定着	○	○	○	○	○
2	豊かな心の育成	○	○	○	○	○
3	健康・体力の保持増進	○	○	○	○	○
4						

５　令和４年度の重点目標

重点的な取組事項－１	学力向上アクションプラン

Ａ　今年度の成果目標	達成基準 （目標通過率）	実施結果 （通過率結果）	コメント・課題	達成度 ◎○△●
基礎基本の確実な定着	４年度の目標通過率８０％ 定着テスト　７０％	４年度の目標通過率８２．７％ ２月実施の定着度確認テストは６９％であった。	教科別の目標通過率は国語 81.6、算数 83.8 で目標を達成した。１月末の定着度を分析して、今年度中にフォローアップを行い基礎基本の定着を図る。	○

Ｂ　目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容（誰が、何を、どのように）	達成確認方法	達成目標（＝数値）（いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●

1 新規	朝学習 （パワーアップタイム）	全学年 国語 算数	毎週 火･木曜日 始業前 10 分	【指導者体制】担任 【取組のねらい・目的】 学習内容の復習・確認を行う。 【使用教材】国語、算数のＡＩドリル	国語、算数ともにワークテストを活用して、児童の達成状況を確認する。	ワークテストの個人平均正答率 70%を 90%以上 （年２回、学期末）	朝学習を実施した。ワークテストの平均正答率 70%以上を 81%の児童が達成した（国語 82.8%、算数 79.9%）。毎月２回程度ＡＩドリルに取り組んだ。	進度に応じたプリント学習ができたが、算数の定着に二極化が顕著に見られ課題がある。今後ＡＩドリルでより個に応じた復習ができるようにする。	△
2 継続	補充教室	全学年 国語 算数	･放課後 毎週 月･金曜日 全員会議の時を除く	【指導者体制】担任・管理職・専科 【取組のねらい・目的】 つまずきがある児童を対象とし、少人数指導体制でつまずきを解消し、基礎的・基本的な学力の定着を目指す。 【使用教材】ＡＩドリル、計算等のプリント、文章読解、言語事項、漢字	担任が児童個々の指導目標を設定する。国語、算数ともにＡＩドリルの学習ログやワークテストやワークシートを活用して、児童の達成状況を確認する。	個のつまずきに応じた指導目標を達成した児童の割合 90%以上 （年３回、各期末）	基礎基本の学習内容につまずきが見られた児童を対象に実施した。個人の学習目標を達成した児童の割合が 79.3%であった。	対象児童を絞り、より個々のつまずきに応じた補充学習を行った。個別指導によって児童の「分かった」が増えたが、完全に定着させるためには演習量確保が課題である。	△
3 継続	サマースクール	全学年 各学年約 10 名程度 国語 算数	夏休み期間中の 10 日 各日 50 分（前期 8 日、後期 2 日）	【指導者体制】 担任＋管理職・専科 【取組のねらい・目的】 下学年にさかのぼって、つまずきを解消する。また、夏休み前までの授業内容の定着をねらい、個別指導を行いながら宿題を行う。 【使用教材】ベーシックドリル、計算プリント、ＡＩドリル	ＡＩドリルや夏休み終了後ベーシックドリルで前学年の学習内容についての確認テストを行う。	算数はベーシックドリルを行い、平均正答率７５%以上の結果を出す。	夏休み期間中１０日間実施した。つまずいている単元が児童によって異なるため、プリント、ドリル、ＡＩドリルなど、使用教材を個人に応じて変えて取り組んだ。	児童のつまずきに対し下学年の内容にさかのぼって個別指導することができた。 今後取組内容及び効果検証方法の改善を図る。	○

4 継続	家庭学習強化	全学年 国語 算数 その他	年３回 ６月 １０月 １月	【取組のねらい・目的】 家庭学習の手引きを４月当初に保護者に配布説明する。 家庭学習強化週間３回実施し、家庭学習の実践と家庭への啓発を図る。	家庭学習状況調査を行う。	10 分×学年の達成率 90%以上の結果を出す。	６月 91.5%、１０月 92.2%を達成した。	家庭学習強化週間以外に実施した「かみきそあじ」調査では、達成率が 80%程度であった。より習慣が定着するよう取り組む。	◎
5 継続	校内研究の充実	全教員 国語	年７回の研究授業	【取組のねらい・目的】 国語科書く活動の教員の指導力向上を図る。	研究授業の実施回数	各学年１回年間７回の研究授業	年間７回の研究授業を行った。	全学年が書く領域の研究を行い、指導力向上の成果が大きかった。	◎
6 継続	小中連携による授業力の向上	全教員 全教科	年５回	共通のテーマ「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」をもとに授業を公開し、協議することで向上を図り、児童の学力向上につなげる。	公開授業の実施回数	小学校３回 中学校２回	連携の小学校３回、中学校２回、公開授業を実施した。	教科ごとに小中の教員が授業について協議、検討を行い、連携して授業改善に取り組んだ。	◎
7 継続	ＩＣＴの活用	全教員 全教科	通年	【取組のねらい・目的】 足立区ＩＣＴ教育推進基本方針の実施。・分かりやすい授業・ＩＣＴの活用	授業観察 作品 アンケート調査	３年生以上授業で文字入力、ネット検索、高学年でプレゼンの指導実施 アンケートの学習意欲に関する項目で肯定的な回答 80%	全学年でタブレット端末を活用した。３年生以上は全員がローマ字入力（または手書き入力）でネット検索できた。５，６年全員がプレゼン資料作成できた。ほかジャムボードやフォームなどアプリを活用できた。ＡＩドリル強化月間には、３年生以上の児童が１ヶ月に目標の平均 300 問を達成した。	校内活用研修を実施し、全教員が授業においてＩＣＴ機器を活用している。児童のＩＣＴ活用スキル、意欲が向上している。 今後もＩＣＴを用い学習活動の一層の充実を図り、学力向上、ＩＣＴ活用能力育成を図る。	◎

重点的な取組事項－２	豊かな心の育成

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自分のよさを自覚し、自他ともに尊重し合う行動様式を身に付ける。	区学力調査の質問項目「自分には良いところがある」で７０％以上。 校内調査で「自他を大切にしている」９０％以上。	区調査で「自分には良いところがある」は２年から６年の平均で 4 月は 80.4%。校内調査の「自他を大切にしている」11 月は 97.8%。	どの学年も目標値を超えていた。自分も友達も大切にしようと生活できている。	◎

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
豊かな心を育む読書活動の充実	年間を通して読書マラソンに取り組む。 目標を６０％が達成する。(1 月末) ・５０冊または 10,000 ﾍﾟｰｼﾞ	・春と秋に読書旬間を実施する。 ・担任・図書ボランティア等による読み聞かせを実施する。 ・図書館との連携を図る。	年間を通して読書マラソンに取り組み､目標達成者は 38%であった。春と秋に全校で読書旬間を行った。コロナ禍のため、図書ボランティア等による読み聞かせ活動は実施しなかった。	読書マラソン達成者は複数回達成する児童が多く、読書量の個人差が大きかった。ボランティア等による読み聞かせを再開する。	△
自己肯定感の育成 思いやりの心の育成	「かみきそあじ」調査で自己肯定感に関するアンケート項目で８０％ 自他の尊重で９０％	･WEBQU アンケートの分析と校内体制で支援を行う。 ・全教職員による「ほめ育て」の実践 ・体験的学習の実践 ・ホランティア活動の実践	11 月の校内アンケート調査では、自己肯定感 84.5%、自他の尊重 97.8%であった。１回目の WEBQU アンケートで要支援になった３人全員が改善した。情報を共有し学校全体で支援した成果と考える。一方で２回目のアンケートで新たに３人が要支援となった。	体験的学習を実施し、児童同士のかかわりの中で相手を思いやる心が育っている。要支援児童へのサポートを継続すると同時に、計画的に児童のソーシャルスキルを育てたい。	◎
命をつなぐ千住ネギの栽培活動	･4 年生が年間を通して、千住ネギを栽培し、種を次年度の 4 年生に引き継ぐ。	・千住ネギ栽培を引き継ぐ意義を理解させる。 ・花壇ボランティアや農業委員の力を借りながら 1 年を通して栽培を行う。	４年生が千住ネギを栽培･収穫し、次年度に種を引き継ぐことができた。学校のＳＤＧｓ の取組に位置づけ、学校全体で食育や伝統の継承について考える機会とした。	活動の意義を４年生なりに理解することができた。栽培活動は大人の力を借りる場面が多かったので、より主体的な活動にしたい。	○

重点的な取組事項－３	健康・体力の保持増進

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
生活習慣の定着と体力の向上	生活振り返り週間の調査･結果周知を２回行う。 体力テストの都平均を前回（１４）よりも多くの種目･学年･男女で上回る。	生活振り返り習慣調査を２回実施した。体力テスト８種目をそれぞれ学年別、男女別に 96 種目に分けると 41 種目が都の平均を超えた。	感染症流行の状況に応じて工夫して体力向上に取り組んだ。運動量確保が課題である。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
体力の向上 （特に投力）	体力テストで一昨年よりも多い種目・学年・男女で都平均を上回る	・投力を高める運動を毎時間の学習過程に組み込む。 ・業間体育（マラソン、短なわ）の実施。 ・運動の日常化	投力は低学年では都の平均を上回っている。全校的に立ち幅跳び、反復横跳びの記録が高く、長座体前屈、50ｍ走の記録が低かった。マラソン、縄跳びは業間体育で練習・記録会を実施し、体力・技能の向上を図った。	中学年以上の投力が向上するように授業改善を図る。児童の日常的な運動量・動きの種類は確実に減っているので、体育の授業以外の運動の機会をつくる。	○
基本的生活習慣の定着 （特に挨拶・整理整頓）	小中連携校で共通実践「かみきそあじ」（家庭学習・身に付けるもの・聞き方・掃除・挨拶・時間を守る）調査で８５％	・年３回の生活振り返りの実施 ・毎日の挨拶運動 ・児童朝会での啓発 ・調査結果の提示	「かみきそあじ」調査の平均は 89％で目標を達成した。靴そろえも 90％以上の児童に定着している。挨拶については代表委員会児童が朝の挨拶週間を提案･実行し、挨拶を励行した。	６年生が下級生のよき手本となっている。これを栗北小のよき伝統として継続できるように､児童のよさを褒め、定着させたい。	◎
保健衛生指導の推進	・虫歯罹患率 15％未満 ・虫歯未治療率 ３０％以下（年度末）	・歯みがき指導の実施 ・継続した虫歯治療勧告。 ・ポスターコンクールへの参加。 ・年間を通した手洗いの励行	・虫歯罹患率 16％、虫歯未治療率 36％であった。１年生のハロー６ちゃん教室や３年生の染め出しによる歯磨き指導を行った。年間通して手洗いができた。	今年度もコロナ禍で給食後の歯磨きはできない状況である。	○

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

重点的な取組事項－１学力向上アクションプランによる学習内容の定着

【課題】

・１月末までのワークテストの観点別定着度は、国語「知・技」80.2%、「思・判・表」83.6%、算数「知・技」83.9%、「思・判・表」72.1%であった。算数の「知・技」は 75%の学年があり、基礎基本として 80%以上の定着を目指す。算数の「思・判・表」は全学年で課題であるが、特に 60%台の学年は算数の指導に力を入れる必要がある。思考することや問題を解くことを面倒に思い取り組む意欲が低下している児童に対する指導方法の改善が課題である。

・昨年度より放課後学習実施の回数が増え、個のつまずきに対する手当ができた。しかし、個人のつまずきの解消状況は約 80%で、基礎基本の確実な定着とはならなかった。また、AI ドリルを活用した復習を行ったが、利活用の仕方について教員側、児童側にも課題が見られた。

【対策】

・計算の仕方を考えたり、工夫して計算したりする場面を設定し、既習の計算のきまりを取り上げながら、計算のきまりが児童にとって抵抗感なく使えるように指導をする。

・習熟度別指導を充実させ基礎基本の確実な定着を図り、児童に「できた・分かった」という自信をつけさせる。学力調査等の分析を行いつまずきの早期発見・早期解消に努める。児童への個別・少人数指導する時間（授業、朝学習、放課後学習）の確保を行う。指導内容、方法については、一律な指導ではなく、個に応じたものとなるように改善する。教員が AI ドリルの学習ログを利用して、個に応じた学習課題を与えるなど、効果的な利用を進める。

重点的な取組事項－２　豊かな心の育成

達成基準とした学力調査質問項目「良いところがある」は平均 84.5%で目標を大きく超えることができた。相手を思いやろうとする優しい心も育っている。読書マラソンは目標には達しなかったものの、読書を頑張っている児童を表彰することで励まし、読書に継続的に取り組ませることには効果があった。体験的な学習やボランティア活動が再開でき、児童の情操を育てる機会が増えた。WEBQU テストを２回実施することで、要支援児童を早期に見つけ出し、継続的にサポートすることができるようになった。友達とのかかわりや学級集団とのかかわりに困り感を抱えている児童に対する手当として、児童のソーシャルスキルを育てていきたい。

重点的な取組事項－３　健康・体力の保持増進

運動発表会は身体的接触を避ける形ながら、短距離走と表現活動を実施することができた。マラソン記録会や長縄跳び、短縄跳びには体育の授業以外にも休み時間に練習期間を設定し、目標をもって運動に取り組み、体力向上に努めた。学校での生活習慣の定着は、「かみきそあじ＋１」の調査で 90%という高い定着率が確認できている。今後も質の高い体育授業、休み時間の外遊びで体力の向上を図りたい。

（２）保護者や地域へのメッセージ

今年度は、これまで新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のために中止されていた教育活動を、実施方法を工夫しながら再開いたしました。本校の特色でもある多くのゲストティーチャーを招いての体験的な学習や学校行事、縦割りでの活動を行うことができたことにつきまして、学校診断アンケートでは、教職員の工夫や努力について励ましの声をいただき、肯定的な評価を数多くいただきました。保護者・地域の皆様にご理解とご協力をいただいたことに感謝申し上げます。次年度は授業を参観していただき、子供たちや学校の様子を知っていただく機会を増やしていきたいと考えます。

重点的な取組事項１の学力定着については、達成基準を超えたといえ、まだまだ十分とは言えません。今後も基礎基本の完全習得、学力向上に全力で取り組んでまいります。次年度も、「全ては子供たちのために」を合い言葉に教職員が一丸となって取り組んでまいります。保護者、地域の皆さまのさらなるご支援をお願いいたします

（３）その他（学校教育活動全般について）

今年度は、感染症対策の工夫をすることで今までコロナ禍で中止していた行事を実施することができました。特にくりきたまつりやマラソン記録会では、子供たちは友達や保護者に見てもらえる、応援してもらえる、一緒にできることにうれしさ、楽しさ、大きな喜びを感じていました。この気持ちが学校生活への期待・意欲の高まりとなり、子供たちを大きく成長させていくのを感じました。保護者の皆様にいただいた感想には、子供の活動の機会が増えたこと、成長を直に見る機会が増えたことを喜ぶ声が多く寄せられました。来年度も、子供たちのよりよい成長のために教育活動の充実に努めてまいります。